

Title	中世仏文学の恋愛観と女性像
Sub Title	Medieval French literature
Author	松原, 秀一 (Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.56- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0056</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 中世仏文学の恋愛観と女性像

松 原 秀 一

「恋愛は十二世紀の発明だ」と云うのはセイニョポスの警句とされ、中世文学者として著名なギュスターヴ・コーアンも「恋愛は中世に於ける偉大な発見、特にフランス十二世紀の発見である」<sup>(註1)</sup>と言っている。ギリシャローマから恋愛をめぐって女性像が描かれている西欧の文学を背景にしての以上の様な発言は何を言わんとするか？近代西欧文学の一大関心事である恋愛を特に十二世紀に発生したとさせるのは何かは外見上の単純さに拘らず多様に複雑な問題を含み、この小論のよく論ずる所ではないが中世西欧文学の女性像を考える時、この問題に全く触れぬ事は出来ぬ程、女性像と恋愛は不可分である。

十二世紀フランスに生れた恋愛と云われるのは所謂「宮廷風恋愛」<sup>(註2)</sup>である。その起源は十九世紀に始まる実証的中世文学研究の当初から未だに論議を重ねている中心課題の一つであって早急な説明は望み難いが宮廷風恋愛最古の詩人を南仏アキテーヌ公爵ポワティエ伯爵ギョーム九世に認める点<sup>(註3)</sup>で諸見解は一致している。ギョーム九世は一〇七一年に生れ一一二六年に没しているので十二世紀初頭の詩人と云えるが、宮廷風恋愛を考える時に先づ想起されるロマンは主に北仏の十二世紀後半から十三世紀の作品であり、しかも同じ語法を用いながらも北仏と南仏ではその内容に於て恋愛観に可成りの相異点が目目される。この問題を恋愛観の点でなく女性像乃至女性の態

度の面から見ると北仏の一六〇年頃の作品、特に「エネアス物語」からそれ以前には見られぬ新しい傾向が見られるのである。

## 一 南仏抒情詩に於る女性

女性崇拜と愛の歎びを初めて歌ったギョーム九世は一〇七一年に生れ十五才でフランス国王より広い領地の主となり、十字軍に参加しては従者が六名になると云う激戦と不運を甜めアラゴン国王アルフォンゾ一世の回教徒討伐を援ける一方、教会領を侵しては破門され私生活の自由度のस्कヤンダルでも破門されると云う豪放な生活を送った。この「今の世に最も慇懃にして、女性を歎むく名人中の一人 *Uns dels majors cortes del mon e del majors trichadors de domnas*」<sup>(註4)</sup>は十一篇の詩を我々に伝えているが、プロヴァンス語による最古の彼の抒情詩が形式上の完成を示している事は西歐抒情詩の起源に数多の仮設を建てさせている。<sup>(註5)</sup>

彼の十一篇の詩は内容の点では多様であり一方では猥らなまでに陽気な女性蔑視の詩から十字軍出征に際して息子を残して行く父親の心痛を極めて真恠に歌うものまであり、夢でのみ出逢う未知の女性への恋までも歌われている。一方には女性を男性の快楽の対象として男性に仕える存在とする詩を書き乍らもギョーム公はその四篇の詩の内で女性に対する憧憬と神秘的な崇高な愛を歌い、騎士として女性に仕える歎びを歌った点でそれまでにない全く新しい思潮の導入者となった。彼に依って女性は男性の幸福の源泉、至福に男性を導びく者とされることとなり、ギリシヤ以来の狂気としての愛、人間をカタストロフに導びく愛と併ぶ西歐の一伝承がここに誕生する。ギョーム公に於ては愛は生の歓喜である。どんな喜びも愛に勝るものはない、どれ程身分が高くても恋人の前では譲らねばならない。そして愛の歎びを知った者は百才まで生きているのである。得られぬ恋は眠りも歎びも遠去け、満たされぬ心は夜露に濡れるさんざしの花の如く震えるのである。<sup>(註6)</sup>しかしこの恋は地中海世界の美の讃歌であり、北仏の神秘化された奉仕のみに喜びを求めず恋ではなく又罪の意識を背景にする不倫の恋でもない。有夫の女性のみがこの高揚された愛の対象たり得るが、そこでギョームは教会を意に介しない。しかもプラトニックな恋でない点で彼の恋は所謂「宮廷風恋愛」とは同一ではない。彼に於ては恋は美であり善である。彼の妻フィリパが夫がシャテルロ伯夫人と不純な関係が続けるのを悲しみフォンテヴローの僧院に入った時、ギョームに忠告をしたアングレームの司教に「お前が櫛を使うようになったら伯爵夫人を捨てよう」と言い返す彼には罪悪感はなく無い。彼にとって愛の歎びは積極

的な力を持つもので病氣すら癒すものなのである *Per son joy pot nakutz sanar*。この生命を活気づける愛への信仰は「オカサンとニコレット物語」の一挿話にも見られる。リムーズンから巡礼に出掛けた癩病患者はニコレットの脛（キ）の美しさを見て病が癒えるが、美女はそのまま善であり近付く者に歓びと健康を与えるのである。これは一方ではフリギアから地中海世界に拡がる「自然（ナツラ）の母」*Magna Mater* のシベール *Cybele* 信仰を思わせないだろうか？この豊饒を司ぐる女神 *Natura genitrix rerum* はバラ物語の続篇に於て第一部の宮廷風恋愛と対照的な愛の観念として現われる。

斯様な愛の観念を背景に「宮人風」の詩に於る宮廷風恋愛の観念、高貴な既婚の婦人に対して自分に関心を持って呉れる事を乞い願ひ愛の服従を約する *fin amors* が彼に生れる。但し彼に於ては愛するのは常に男性の側でありその愛もプラトニックなものではないが、彼によって拓かれた途は南仏では所謂宮廷風恋愛にすぐに発展するのである。未だ見ぬ遠くの恋人への愛 *Amors de Ionh* を歌うジョフレ・ド・リュデル、愛を失う怖れから敢て告白出来ず恋人の傍に座するだけの幸福、愛する対象を眺めるだけのひそやかな歓びを歌うチエルカモンから、この宮廷風恋愛は神秘化の途を辿り、ダンテに師と仰がれる十三世紀初頭のアルノ・ダニエル等まで南仏抒情詩人は近付き難い高貴の人妻に対する思慕を歌い女性はラウラ、ペアトリーチェの如く天上界に男性を導く者へと純化されて行く。

この宮廷風恋愛は恋の対象として既婚の婦人のみを求め、乙女は全く対象とされず、しかも恋愛は教養と身分のある者のみ許される特権である。南仏では男性の特権であるこの恋愛が北仏に伝わりと女性の役割りが重視され、論義を重ねてこの恋愛の細則まで明文化されるようになり次いでドイツ、イギリスとヨーロッパ各地に伝播されるのである。

## 二 北仏の宮廷風恋愛

ギョーム九世は一一二六年に五四才で死ぬがその息子ギョーム十世も十一年後にサンティアゴ（コンポステルの聖ヤコブ教会）に巡礼の途上死ぬ。その遺言によって娘のアリエノール *Alienor, Eleonore* はフランス国王の息ルイ・ル・シエヌ *Louis le Jeune* に嫁する事になり、一一三七年七月二十二日に南下して来たルイとサン・ジャン・ド・リュツ *Saint Jean de Luz* で結婚式をあげるが、式の八日後にルイ六世が死去し、アリエノールはフランス王妃となった。ルイ七世は王妃を熱烈に愛し、当時のスキャンダルとなったが明（註9）

るい南仏から来たエレオノールは北仏になじめず遂に十五年後に娘二人を遺して離婚し二ヶ月後に後の英国王ヘンリー二世に再婚する事になる。エレオノールは斯うして北仏と英国に南仏で生れた「宮廷風恋愛」の観念を齎らす、北仏に入るとこの愛は理論化され規範が作られた。<sup>(註11)</sup>

然し北仏では南仏から導入された宮廷風恋愛と異なる、結婚と云う正当化を求める恋愛の観念も生れこの二つの恋愛観はキリスト教的倫理観を間に平行線を辿り乍らも恋愛を学ばれるべき技術<sup>art</sup>と見る共通点で、倫理観及至規範に縛られぬ自然の理法としての愛、世代を存続させる意志としての愛と対立する。<sup>(註12)</sup>そしてトリスタン物語の出現はカタストロフに導く狂気としての愛の絶ち切られていたギリシヤ文学の伝統を新たに興す者と見ることが出来よう。

恋愛観の系譜は斯様に十二世紀のフランスに於ては複雑なものである。しかし男性に対する女性の態度としてこれを眺める時、北仏には一一六〇年頃から共通の新しい傾向が見うけられるのである。

### 三 北仏に於ける女性像

北仏文学に於ける恋愛の出現は長篇物語の發生と時を同じくしている。むしろ恋愛描写の出現こそロマンを特徴づけるものである。このジャンルの出現に読者としての女性が関与している事も夙に説かれているがロマンは八音節平韻<sup>オクトシラリムフラット</sup>で書かれている点で十二世紀前半に始まる年代記、歴史作品、科学的(教訓的)文学に遡るものであって十音節半階音<sup>デカシラリムハーフ</sup>もしくは単一脚韻<sup>モノシラリム</sup>で書かれ朗誦された武勳詩<sup>(註13)</sup>に由来するものではない。ロマンと呼ばれる最古の長篇物語は古代模倣物語の中に分類される「テーベ物語」「エネアス物語」「トロイ物語」「エラクル」等で此等の作品は一一五〇年から一一六五年の間に書かれるが、同じ頃短篇物語として最古の「ピラムとティスベ」がやはり書かれている。この短篇物語がオウイディウスに依っている事と、ウイリギリウスに依る「エネアス物語」中、中世作家が挿入したエネアスとラヴィヌの千六百行に亘る恋愛の部分にオウイディウスの影響がはっきり見られる事は注目しほしい。

ロマンの出現後も武勳詩は創り続けられるがエネアス物語(一一六〇)の頃から武勳詩に於ても女性の占める割合は大きくなり、しかもその態度に大きな変化が現われるのである。

ギユスターヴ・コーアンはクレティアン・ド・トロワと文名を競ったゴージェイエ・ダラスがその作「イルとガルロン」<sup>(註14)</sup>の中で女の身で自分から恋を打明ける可ものでないと云っているのを十二世紀の武勳詩「アミとアミル」で乙女ベリサンが美男のアミルを見て恋し世の人が何を云おうと

父が毎日私を打たせようと構わない

あの人とはとても美しいもの<sup>(註15)</sup>

と夜中にアミルの部屋に忍んで行くのを比較し、女性らしい慎しみ深さにロマンの世界の感情の洗練化を見ているが、これはピエール・デが指摘する様にベリサンにも、ゴージェイエと同じく考え自制するラヴィヌにも<sup>(註17)</sup>同様に、受動的でなく自分から恋し、恋人を選択する女性の自主性の新しさ、女性の自我の発見を見る可きであらう。即ちラヴィヌも母の勤める許婚者トゥルニユスがあり乍ら、母が口を極めて悪く言うエネアスを愛していると言いつ切るのである。南仏抒情詩では愛するのは男性であり、女性は受けるのみであり、たとえ喜んで男の愛を受けてもその場合は形而下的快楽を受けるものと描写されているが北仏文学では女性の意志が考慮される様になるのである。<sup>(註18)</sup>

恋愛は南仏では男性を高貴にするものであったが、北仏では愛は男性を勇猛な騎士とし女性を賢くする。貴族の身分は恋人の必要条件でなくなり、恋によって男は勇者となり賢くなる。この例は後にペルスヴァルに体现される。

ロマンの發生に依って女性の立場が考慮される事は恋する女性の心理描写の細密化に現われ、女性の容姿の描写に現われる。

南仏抒情詩では女性の美しさの描写は短く抽象的、主観的であって「優雅にしてすばしい身のこなし、美しき肌の色、どんなバラの木もつけぬ美しい花 Sos cors gais e isneus E complitz de bella colors c'ains de rosier no nasquet flors Plus fresca ni de nulls roudaus 望み通りの魅力の優しい顔 Doussa cara'a totz aibs volquitz プロンドの髪の、優雅だが白く活気に満ちた身体 Sa crin saura El cors gai,graillet e nou こよなく美しく良き人 La plus belh e la melhor これより美しい人も知られず、目も口も、より美しい人を告げられぬ人 Hom gensor no'n pot trobar Ni huehls vezer Ni boca dir 愛情深きこきいきた眼差し li sen bel oil amoros e gai 白百合にじめる雪の肌、五月のバラの肌 Cors blancs com neus sobre plai sa colors cum rosa de mai 甘美な優しい貴女 La dompna es agrandans e plazens 等とのみ描かれるが北仏一一五〇年の「テーベ物語」は既に後にマティユ・ド・ヴァンドームが規範化する規則を

殆んど具現し、上から下に笛条書と云える程順序正しく描写されている。アドラスト王の二人の娘は、「純金の髪飾りをし頭を垂れて」ポリニスの前に出てくるが、「大きすぎず小さすぎず」中背で「髪は金色、長くしなやかで足許まで届き額は広く白く高く両側に髪が流れ目は碧く愛らしい。これ程美しい眼は嘗って見られた事がない。鼻も大き過ぎず小さすぎず、口は一文字に歯は小さく白く揃いロンドンもポワティエもこの口の笑みと接吻程の価値は無い。顔は明るく血色もよく美に飾られている。額は長く云い様もなく形良く手足は細く優しく美しう」(Guarri serront et retenu Quis porront tenir nu a nu. Quant Nature les aornat, tai doelise lor dona Que jo nel vos

(註19)

raouter) 同じ物語中のサラマンドルの美しさも同様に描かれ、活き活きした顔は血色よく小さな口、肉つきの良い均勢のとれた唇

(*Por bien baisier les fist Nature*) 愛情に満ちた笑みを含む碧い眼、白く柔軟な肌、細い腰、中背の彼女は花模様(註20)の緋の上衣の肩から灰

色のコートを掛け髪は長く細く金髪で首の周囲を巻いている。十二世紀末の「ブルターニュのガルラン」では青年も、「血色の良い牙

えた顔、まっすぐな鼻、碧い眼で金髪は額にかかり、紅の口と白い歯は象牙か銀と紛い、言葉つかい良く息も香わしくも美しく腕も長

く肩も大きく形良い」と云われ恋人フレーヌは「ナトゥラは彼女の髪を金で染め、その髪をフレーヌはわけて一方は編み一部は顔に落

ちかかるので指でかきわける」「額は白く、なめらかで、雪より白い程にナトゥラが白くした、鼻は豊かで白くはつきりと、まつげは細

く茶色、目は碧く星の如く輝き、耳は小さく位置もよく、紅の小さな口と唇は触れる物を和やかにする。白い美しい歯は粒よりにすきな

く並び顎も位置よく、白百合の顔に紅をおいている唇は五月の朝早く咲くバラの様(註21)であり、以下足の先までの描写が続いている。南

仏抒情詩には斯うした具体的な描写が無いのは必ずしも抒情詩と云う形式の故と云えないのは後にヴィヨンが「デーベ物語」よりもよ

り厳格に規則に従っている事から解る如く北仏文学に入って女性描写が始まる為と云えよう。そして女性描写は服装にも及ぶが一方心

理描写も細密になる。エネアス物語の女性の心に恋が如何に育つかの描写は新鮮なもので後のロマンは皆エネアスの心理描写を規範と

する様にする。恋に依って勇者となる男性はエネアスが既に示すが、女性はロマンによって優美な被保護者となって行き、嘗って武勲

詩に現われたギョーム・ドランジユの妻のように夫に劣らない勇猛な妻は全く現われなくなる。ギョームの強き妻ギブールがギョーム

に倒された回教徒の妻であって恋なしにギョームの妻とされているのも武勲詩らしい。女性(註22)はロマンの発生と共に女性化し、北仏で織

細な心情を育てられてゆく。男に伍して武勇をきそつた女性は、男性を見て顔を赤らめる者となる。女性は女である事を意識し始め女

性らしい差いを示すのである。中世フランスのロマン及至レ等宮廷風文学の作品には、宮廷風恋愛（騎士と他人の妻との恋）を書く作家と結婚に至る愛を書く作品の二系列を見ることが出来、前者にマリ・ド・フランス、トリスタンが後者に「イル・エ・ガルドン」「エレックとエニド」「クリジエス」等があるが、その何れも女性像としての共通点は此の女性の羞らいにあると思われる。アンドレ・シャプランのはその十三ヶ条の訓えの第十三条に「恋愛の喜びを与え又受くるには或る羞恥の心を持って」と云うが、これは中世学僧のラテン詩に見られる自由なエロティシズムと対照的である。ロマン中の女性は優雅な節度のある女性になり牧歌に於てもういういしく而も男の前で要心深い乙女となる。エニドはエレックを見て赤くなり、エレックのフィアンセとして騎士達の面前に出るとまっかになり一歩も進めなくなる。ベルヌの「トリスタン狂乱」ではイズーは変装したトリスタンがイズーに二人にしか解らぬ想出を語ると顔をうつむけ赤面する。アーサー王の妃グニエヴルは王の乳兄弟宰相クー（ケイ）との間を邪推されるとうつつむき赤面する。女性は優雅に *gente* 心優しく *douce* になり彼女の美点は「礼義、振舞をわきまえている」*Comte*（*^cognita*）事であり、屢々歎き泣く姿を美として描写されるようになる。この典雅な女性像は十三世紀にファブリオとバラ物語第二部で美しい装いをつぎつきと剣がれる事となるが同時に八音節のロマンは散文と変化していく。一方優雅な女性像は聖母マリア崇拜に結晶して行き、教会による女イヴに依り墮ちた人類の、女性マリアによる救済と云う女性の二面性の矛盾の止揚が浸透して行く。十三世紀のゴージェ・ド・コワンシからジャン・ド・サンカンタンを通り十五世紀のジャン・シエロに至る聖母奇蹟物語は多くの罪深い女性のマリアによる救を歌う。その女性達は人間としての純な心と共に限らない弱さも持つ存在であり、アムールクルトワ風ファブリオ風という類型からルネサンスに向い現実化に足を踏み出すといえよう。

註1 Gustave Cohen: *La Grande clarté du Moyen âge* 1945. P. 85

註2 *amour courtois* は中世の用語ではなく、女性に対する敬慕の愛は *fin'amors* と言われた。 *amours courtois* の語は Jean Frappier に依る *レゾロニア* 註1に Gaston Paris が始めて用いた。 Jean Frappier: *Vues sur les conceptions courtoises*. Cahier de Civilisation Médiévale no. VI pp. 137 note (13)

註3 キョーム九世。正確にはアキテーヌ第九代公爵ボワタイエ第七代伯爵。キョームに於ては Reto Bezzola: *Guillaume IX et les origines de l'Amour courtois. Romania Tome 66*, pp. 145—237 を参照。作品は *Les Chansons de Guillaume IX, duc d'Aquitaine (1071—1127)* éditées par A. Jeanroy C.F.M.A. 9 の校訂版である。



註 4 J. Bouëtère et A. H. Schutz (éd) *Biographies des Troubadours, textes provençaux des XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles*, 1950

註 5 起源として四つが大別される。一民間歌謡起源説(ジャンロノ)二古典ラテン詩起源説(ノマラノ)三中世ラテン詩起源説。Clerici Vagantes を重視するものと、宗教詩を重視する二派がある。四アラビヤ詩起源説。イベリア半島又シシリア島のアラビヤ文化からの影響を考える説。

Denis de Rougemont のカタリ派説はラテン・イタリアの Fortunatus 影響説は二人入ろう。Bezzola はギョーム九世とフォンテヴロニ僧院の関係をロマンテ詩上で論じた。フォンテヴロニ僧院は聖母に献じられ、ギョームの妻二人が尼僧となつてゐる。宗教的神秘主義のアンティテーとじギョームが世俗的神秘主義を歌つたこと。尚シルレンの論証にも従ふ。(La Théologie mystique de Saint Bernard, 1934, pp. 193—215)十三世紀末に於て聖母崇拜と宮廷風恋愛の関係のあらはなラトリア崇拜と抒情詩の起源を関係する傾向は無くならない。ラトリアンナル抒情詩の詩型はラテン聖讃歌にまつて説明し、アラウト起源は詩型の問題では仮説の域を越つていないと思はれる。

註 6 Totz joys li deu humiliar. Et tota ricors opezar Midon, (...) E deu hom mais cent ans durar Qui l'joy de s'amor pot sazir. Per son joy pot malaut sanar, E per sa ira sas morir (Guillaume IX, Poésies IX, Ed. Jeanroy pp. 22—23) Non vei messenger ni sagel, Per que mos cors non dorm ni ri, (...) La nostr'amor vai enaissi. Com la branca de l'albespi Qu'esta sobre l'arbre en treman, La nuoit, a la ploja ez al gel. (*Ibid.*, X, pp. 25)

註 7 William of Malmesbury が伝える。Angoulême の司教は法王領の知事だったが毛が薄かったと伝えるが *cavillatus in virtum cuius perte nius caesaries pectinem non desideraret* 中世の僧侶は周囲のみ残して大きく剃髪してて櫛は何れにしても無用であつたと思われ。聖職者の剃髪は初代教会時代修道院生活が盛んになつて以来行われ六三三年のトレド第四回公会議で僧侶の義務となつた。

註 8 L'autrier vi un pelerin, Ne estoit de Limosin, Malades de l'esvertin, Si gisoit ens en lit. Mout par estoit entrepris, De grant mal amaladis. Tu passas devant son lit Si soulevas ton train Et ton pelicon ermin, La chemise de blanc lin, Tant que ta gambete vi: Garis fu li pelerins Et tos sains, ainc ne fu si. Aucassin et Nicolette Kritischer Text von H. und W. Sucher 1932 XI 16—28

註 9 自然の女神はアスタルテ又イスタールと呼ばれフェニキヤ、カナーンからフリギアに拡がり、ギリシャ、ローマではアルテミス、シベルとして信仰された。女神を識らぬユダヤ教から出たキリスト教が神の母マリアを公認したのがネストリウス派の分離を惹起した四三二年のエペソの公会議であるのは、この街がシベルを祭る神殿の街であるだけに興味深い。

註 10 妻への情熱は不道徳とされ結婚は種の存続のために神の創造に参加する業とされる。ジョンオウソールズベリはルイ七世が妻アリエノールを amore immoderato で愛したことを、C. S. Lewis: *Allegory of Love* pp. 32—43 は夫婦恋愛を論じてゐる。

註 11 特に有名なのは Andreas Capellanus: *Arte Awardi*

註 12 バラ物語四四一行以下参照。

註 13 武殿詩ですら、現在写本は既に朗誦用でないとする説も有力である。

- 註14 Gautier d'Arras 14 Ille et Galeron. Eracle 等を擧げた。後者はプリエノールの娘の一人マリド・シャンパーニに奉げられている。このマリドはクレティアンに「ランスロ」の主題を与え、アンドレ・シャプランに「恋愛論」を書かせている。「ランスロ」は北仏最初の「宮廷風恋愛」の作とされるが「エルク」で結婚愛を讃げ、クリジエスで反クリスタンを書いたクレティアンの誰いの不倫の恋愛の話である事は注目に値する。
- 註15 Il ne me chaut si li siècles m'esgarde Ni si mis pere m'en fait chascun jors battre car trop i a bel home G.Cohan とよむ。但クレティアンのヘルスヴァルでも、保護を求めるブランシタフロールは自分からヘルスヴァルの寝室を訪れ、戻でヘルスヴァルの頬を濡らして起して居た。
- 註16 Pierre Daix: Sept Siècles de roman 1955. PP. 37—38
- 註17 Enes, texte critique par J.Salverda de Grave. (Bibliotheca normanna IV) V. 8720—8724. 但「ヘネック」 V. 9079 P. Ne deit pas tot son cuer mostrer A femme, ki la veult amer. 45 r r 5 r 8°
- 註18 Ja m'amigu anueg no m'aura Que no'm vueh, aveh! aver l'endema; (Jamais mon amie ne m'aura une nuit qu'elle ne veuille m'avoir le lendemain) Guillaume IX Poésies VI.V. 37—38 巻°
- 註19 Le Roman de Thèbes VV. 935—936, 961—979. Edition Cousmans.
- 註20 ibid. VV. 8429—8460.
- 註21 Galerin de Bretagne VV. 1188—1197, 1240—1312. éd. L.Foulet C.F.M.A.
- 註22 クレティアン・マ・トロフのイヴァンでも自分の夫を殺された未亡人はイヴァンを愛するようになるが、ここでは恋愛がある。女性が常に強い保護者求めていた時代には、夫の殺害者は未より強者である事を立証した訳で求婚者の資格があった。
- 付記 中世の恋愛観、女性像について註中の諸書の他に主に次の諸書を参照した。
- Maurice Valency: *In praise of Love, an introduction to Love-poetry of the Renaissance* 1958 New York
- Pierre Jonin: *Les Personnages féminins dans les Romans Français de Tristan au XIII<sup>e</sup> siècle.* Aix-en-Provence 1958
- Gustave Cohen: *Chrétien de Troyes et son oeuvre* 1948 *La vie littéraire au Moyen Age.* 1953
- René Neill: *De l'Amour Provençal (In Le génie d'Oc et l'homme méditerranéen)*
- Henri Davenson (pseudonyme de H.I.Marrou) *Les Troubadours.* 1961
- Maurice Wilmothe: *Origines du Roman en France, l'évolution du sentiment romanesque jusqu'en 1240*
- Jean Frappier: *Vues sur les conceptions courtoises dans les littératures d'Oc et d'Oïl au XIII<sup>e</sup> siècle.* Cahiers de Civilisation Médiévale No 6, pp135—156